

春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて冷しかりけり？

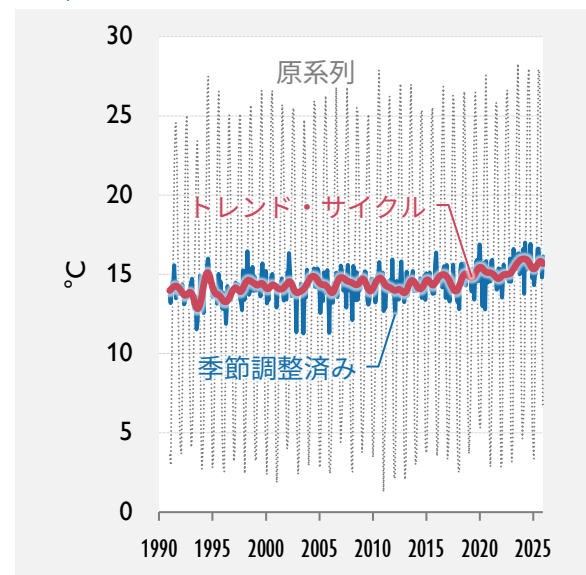
日本エネルギー経済研究所 計量分析ユニット | 柳澤 明

2025年までの3年連続の猛暑など、昨今は高温傾向が頻発する(図1)。同時に、春や秋を感じられる日々が少なく、1年四季が冬と夏のための「二季」になっているとの声もある。東京近郊では、昨秋、気温は「暑さ寒さも彼岸まで」を裏切ったかと思えば、10月下旬に急低下した。秋はあっという間に過ぎ去っていった感がある。

こうした感覚をもたらしている変化の傾向は、平均気温を季節調整して得られる季節成分とトレンドからより明瞭に把握できる(図2)。この10年ほどは、温暖期はいずれの月も高温化傾向にある。7月の気温上昇は8月と並んで著しく、夏の始まりを早めている。9月はさらに上回る気温上昇にさらされており、厳しい残暑が秋の訪れを遅くしている。一方、寒冷期は多くの人の予想を裏切りうる。「地球温暖化」は人口に膾炙するが、温暖期ほどの変化は見受けられない。ただ3月のみは高温化が急進している。東

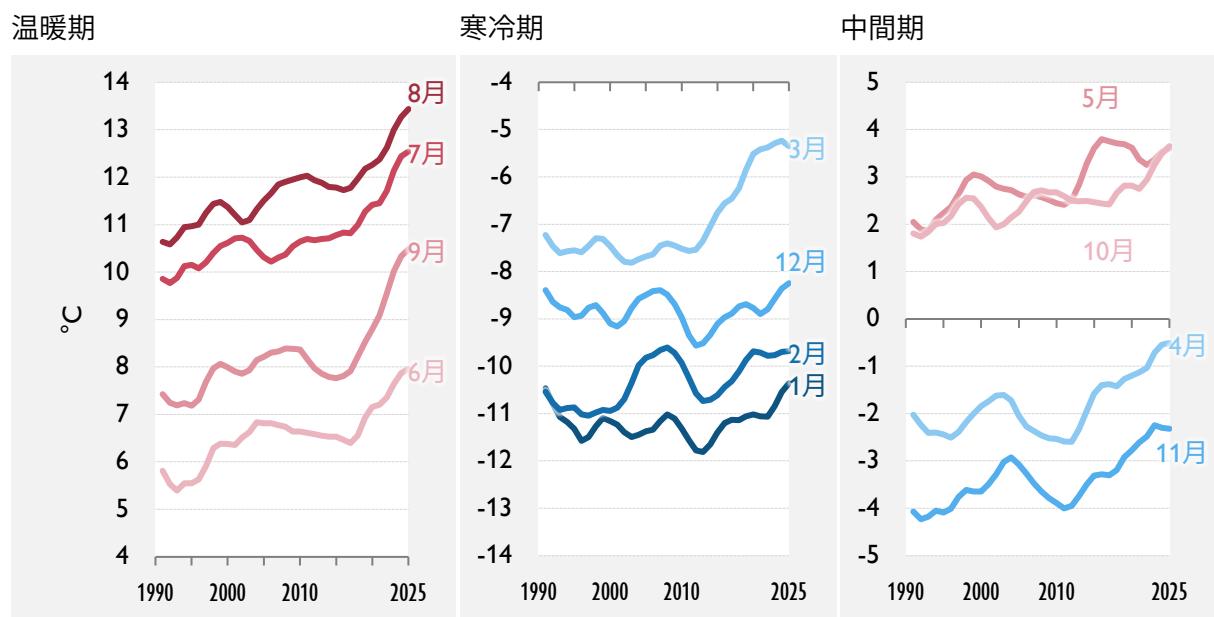
京では桜の開花は2020年代初には3月中旬まで早まった。冬はやって来るのはさほど変わらないが、足早に去るようになっている。

図1 | 平均気温



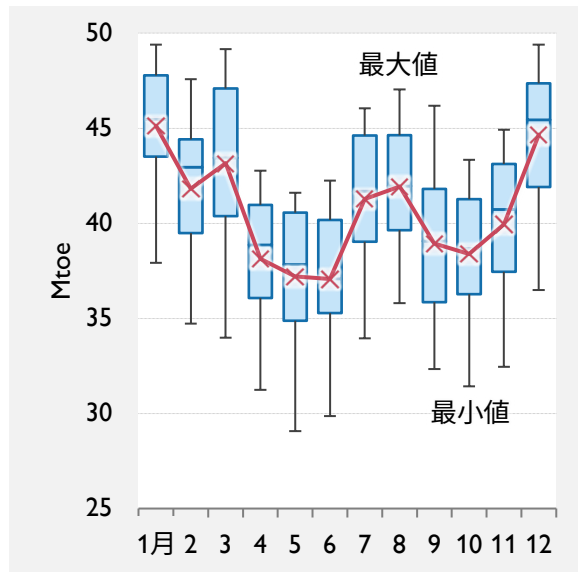
注: 全国42地点の単純平均
出所: 気象庁データより算定

図2 | 平均気温の季節成分+トレンド



こうした変化の影響は、慣れ親しんだ季節感の喪失といった情緒の領域にとどまらない。その余波による青果の不出来は、物価高を勢いづかせうる。需要パターンが季節に大きく左右される衣料品などは、販売戦略の練り直しを迫られている。では、エネルギー消費(図3)はどういった影響を受けているのであろうか？

図3 | 一次エネルギー供給(1995/1～2025/10)

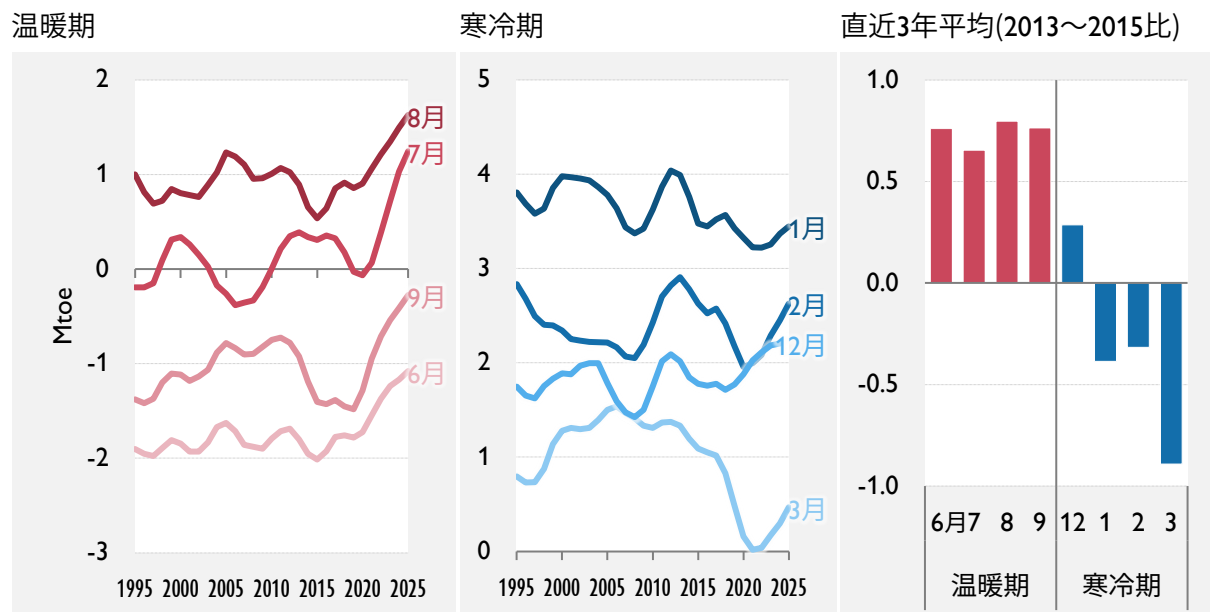


出所: IEEJ「EDMCエネルギートレンド」

足元にかけての10年ほどの傾向として、温暖期の高温化進展が、冷房需要の増大を通じてエネルギー消費の増加寄与を拡大させている(図4)。これは、気温上昇が急な9月そしてここ5年ほどは7月においてとりわけ顕著である。一方、寒冷期では、早まる冬の終わり・春の始まりが、3月の暖房・給湯需要に減退圧力をかけている。もちろん、これはエネルギー消費の減少寄与につながっている。

季節の移ろい方が変わるにつれ、9月は気温がエネルギー消費を押し下げていた月から中立的な月に近づき、7月は中立的な月から押し上げる月へと移行している。逆に、3月は気温がエネルギー消費を押し上げていた月から中立的な月へと向かっている。こうした潮流が今後も継続するようであれば、長期化・凄烈化する夏に対応するためのエネルギー供給力の底上げ、夏始まりや冬後半の在庫水準の見直し、エネルギー不需要期を中心に行われている供給設備の定期点検・修繕時期の再考などをさらに迫ってくることになるだろう。

図4 | 一次エネルギー供給の季節成分に対する気温(度日)の寄与



出所: (X-13ARIMA-SEATS季節調整法でユーザー変数を用いなかった場合の季節成分+トレンド)-(ユーザー変数に冷房度日、暖房度日を用いた場合の季節成分+トレンド)で算出

お問い合わせ: report@tky.ieej.or.jp